

金沢区アメニティ・タウン計画

村井 淳

一 ――アメニティ・タウン計画の策定

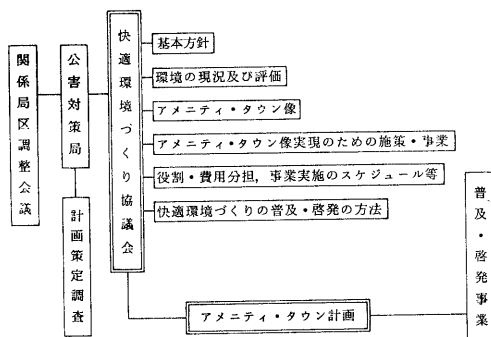
① 計画策定のプロセス

「アメニティ」という聞きなれない言葉を、このごろ少しづつ耳にするようになった。アメニティとは「私たちの生活環境を構成する自然や施設、歴史的・文化的伝統などが互いに他を活かし合うようにバランスがとれ、その中で生活する私たち人間との間に真の調和が保たれている場合に感じる好ましい感覚」であると説明されている。また、「適切なものが適切なおとろにあること」「The right thing in the right place」といった説明もなされている。

「金沢区アメニティ・タウン」事業は、そもそも環境庁が昭和五十九年度から快適環境整備事業を実施することとなり、その対象として横浜市をはじめ全国二〇市町村を選定し、快適環境づくりを総合的・計画的に進めていくための計画を策定することについて国が助成、指導するという背景をもっているのである。

具体的には公害対策局の環境管理室がその主体となって、金沢区をそのモデル地域として選定し、学識経験者・地元(金沢区民)・行政の三者からなるアメニティ協議会を設置し、シンポジウムの開催や区民意識調査などを行い、「金沢区アメニティタウン計画」の策定などを行っている。

図一 計画策定の手順



金沢区がそのモデル地域に選ばれた理

由は、快適環境の素材となる山林緑地や海浜や河川などの自然環境、中世以来の歴史的資産が比較的そろっており、かつ住宅開発や工業流通業務の集積など都市化が進行しており、都市と自然に関するあらゆる要素が存在し、モデル地域としてふさわしいと判断されたことによる。

② 計画の概要

① アメニティ・タウン像と基本目標
計画では金沢区の望ましい将来像として「自然と文化を大切にすることにより、緑や水辺とのふれあいや歴史を想う快適な環境(原風景)を育て、みんなの心が通い合う人間性豊かな街」というアメニティ・タウン像を掲げ、快適環境づ

- 一 ――アメニティ・タウン計画の策定
- 二 ――計画と区役所の役割
- 三 ――風景の再発見とまちへの愛着
- 四 ――おわりに

くりの基本目標を次のとおり設定した。

- ①身近な緑や水辺に親しめる環境づくりによる住民とのふれあいの促進
- ②まちづくりにより厚み、奥行きをもたせるための良好な自然環境の保全
- ③歴史・文化と自然や社会が結びついた過去と将来を考えた環境づくり
- ④原風景をとりいれ、人間尺度にマッチした安全な都市空間の創出
- ⑤住民・企業の積極的な参加やボランティア活動による環境づくり

以上の目標のもとに、区内のアメニティ資源の現況評価、利用整備の方向などについての検討がなされた。そして住民意識調査や現地調査、あるいは協議会での議論などから次のような課題・問題点が出された。

- ①アメニティ・タウンの基礎は公害をなくし、豊かな自然を残すことであり、市への期待も公害対策と自然の保全が最重要視されている。
- ②区内にアメニティ資源は多くあるが、交通の不便などのため十分に生かされていない。また潜在的な資源の発掘がなされておらず、市民のアメニティ・マインドが育っていない。
- ③地域の個性がはつきりせず、また、自然環境・利便性・友人知人・発展性など種々の理由で地域への愛着も足りない。
- ④歴史・文化的資源を現代に生かす工夫

が足りない。

- ⑤水質汚濁やゴミなどによって、海や川など水辺が死んでいて、人々からも忘れられようとしている。
- ⑥駅前がゴミゴミして楽しい買物ができない。また安心して楽しく歩ける道が区内に少ない。
- ⑦平凡な自然を大切にすることを育て、身近に鳥や昆虫の住めるまちづくりをする必要がある。
- ⑧開発などで緑がどんどん失われる一方緑を保全する施策体系がバラバラで、これを調整する機能がない。

アメニティ・タウンづくり推進の市民サイドの核が育っておらず、種々の情報のネットワーク

表一 アメニティ・タウンづくりの主要施策・事業

1	海に親しむ場づくり	<ul style="list-style-type: none"> 海の公園整備 (44~63年事業中) 海辺プロムナード 海のふるさと村 (柴漁港の整備、海の朝市、漁具博物館の整備)
2	平潟湾環境保全の推進	<ul style="list-style-type: none"> 水質保全に関する計画の策定・推進 (底泥のしゅんせつ53年~) 下水道整備と河川水の涵養 (分流式採用、雨水浸透ますの導入) 野島水路の開放 環境保全運動 (平潟湾海辺フェスティバルなど市民参加による運動)
3	緑の保全と利用	<ul style="list-style-type: none"> 緑地保全・保存事業 (侍従川宮川水系などの源流域の保全、市民の森) 自然観察の場づくり (横浜自然観察の森、ビートルズ・トレイルの整備) 緑化の推進 (ブロック塀生垣転換、緑のネットワークづくり)
4	歴史的環境の保全と再生	<ul style="list-style-type: none"> 称名寺文化ルネッサンス (称名寺境内保存整備事業 55年~62年) 能見堂の再生 (能見台緑地の整備) 金沢古道の整備 (六浦道、金沢道、白山道、野島道などの整備) 歴史教室・講座の開催 (地元の大学、歴史研究家の協力による充実)
5	環境保全のための地域連帯	<ul style="list-style-type: none"> アメニティ・ウォッチング (アメニティ・カルテの作成) 魅力ある道づくり (サイクリングロードの整備) 魅力ある遊び場づくり (子ども環境会議の開催) ヨコハマさわやか運動 (市民のアメニティ意識の啓発) 近隣騒音自粛運動 (ルールづくり)
6	地域環境への愛着増進のためのイベント	<ul style="list-style-type: none"> 快適環境づくりシンポジウムの開催 (市民みんなのシンポジウムの開催) 金沢の古道めぐり (古道を歩く会の開催 60年度~) 金沢のシンボルづくり (タウンカラー選定、花火大会、たこあげ大会開催)

1)も形成されていない。

これらを受けて、計画の基本目標を達成する手段として、アメニティ・タウンづくりの施策・事業が計画された(表1)。

二 計画と区役所の役割

アメニティ・タウン計画策定の主体は公害対策局であり区の役割としてはすでに収集してある情報の提供などが限度である。区役所で協力できるセクションとして区政推進課が参加しているが、それは「区内の事務事業の総合調整」としてなのである。

区として事業に直接参加できるセクションがないことは、区役所主催の自主事業以外のすべての事業に共通である。都市基盤施設づくりに力を入れざるを得なかった横浜市では、それぞれの事業局がそれぞれの事業計画に合わせて全市的な規模で進めざるを得ないわけであり、そこに区役所の登場する場がなかったのは仕方ないことなのである。

しかしながら、すでに多くの指摘がなされているように、区行政の拡大充実、区民に身近な区役所にするためには、現在のままでよいわけがないのである。区民に区を近づける努力、そこに住む人々と同レベルで「住みやすさ」を共感でき

る感覚が区行政に必要なのである。

現在の主管局である公害対策局による計画の策定事業は、あくまでも計画の策定・住民への周知までであり、アメニティ・タウンづくりの出発点にしかすぎない。今後、長期的に本計画の進行を管理していくのは区行政にゆだねられることが望ましいのではないか。

計画に基づいた「区内の事務事業の総合調整」という作業は現行の区役所体制でできる範囲を超えられないが、できる限り積極的に、区の主体性を発揮していく必要があるだろう。

また、金沢区では現在、海の公園の整備、市民の森の設置、金沢自然公園の整備、称名寺境内の保存・整備などが行われているが、このような物的施設整備のみならず、快適環境づくりに向けて市民意識の高揚を図り、行政と市民、企業などが共通の目標を持って、役割と責任の分担をし協力することが重要であると考えられる。

つまり、物づくりのみでなく、地域づくり、人づくり、組織づくり、しくみづくりなどのソフト面での施策の推進が、アメニティ・タウンづくりのための最重要課題である。この分野では、今後、区役割・主導性が大いに期待されるのである。

三——風景の再発見と まちへの愛着

①「私の金沢八景」から 「新八景づくり」へ

金沢区という区の名前そのものが、歴史を感じさせ、「私たちの街」として受け入れられやすい。幕末の開港にはじまる横浜(ヨコハマ)と比べ、一行政区の方がはるかに古い歴史を持つところこの街の誇りがあるのである。

また、現在では京浜急行の駅名の方で知られるようになってしまったが、ここは「金沢八景」として知られる景勝の地だったわけである。平潟湾や野鳥公園、海の公園の人工海浜やこの三月に埋立をほぼ完了した島など、海水を直接肌にあられるような場所は市内では金沢区以外には見あたらない。横浜市で一番高い山、大丸山をはじめ、それに連なる市民の森や金沢自然公園から鎌倉へぬけるハイキングコースなどもそろっている。横浜市の中で言えば金沢区は自然にも、称名寺や金沢文庫に代表される歴史的遺産にも恵まれているし、そういった資源を生かした事業も現在進行中なのである。

これらの資源は有効に活用すべきなのだ、すでに他の区で試みられている「つるみ八景」や「旭一二景」とは事情がちがって、早急に「新八景づくり」を

行政の音頭で行うには「金沢八景」はその背景に長い歴史と知名度を持ちすぎているのである。区内の大型事業(海の公園、金沢自然公園など)が完成し街としての落ちつきをみせた時期、あるいは、区政何十周年などの記念事業として長期的に考えた方がよく、現段階で求められるのはそれぞれの区民にいだいてもらう。「私の金沢八景」の方がふさわしいと思う。

そしてこの自然や歴史を区民の日常生活に結びつけ、いかに愛着を持ってもらうかが先決なのである。その地にあればどこからでも見えるような「ふるさとの山」に誰もが愛着を覚えるように、平潟湾や釜利谷の山、その他のアメニティ資源にしても、日常の中で目に見えること耳に聞こえることなど具体的なものであることが前提なのである。

それは、もっと身近に垣根越しに見えるみかんであっても、軒先にやってくるすずめであっても、雑踏の中からはかすかに聞こえるお寺の鐘であつてもよいのである。要は、それらの身近な生活の中から街に親しみを感じるものを、それぞれ区民が見つけ出せるような下地を用意することにありと思う。

②「アメニティ・ウオッチング」 「計画」書では、その例としてアメニ

ティ・ウオッチングという手法を紹介している。

「自らの足でまちを歩き、見るうちに、今まで見過していたようなまちのよいところ悪いところを見つけ、まちに興味をわいてくる。興味が愛着となり、どうしたらよりよいまちになるか考える。さらにいろいろな人の立場に立つて考える。そこからまちづくり運動が行われる」と提起している。その方法として、ここでは

四人の調査者に、指定した対象地点の風景についてそれぞれの印象・現況診断・快適さに関する総合評価をまとめ、アメニティカルテの作成を行っている。

詳細は「計画」書にゆずりたいが、この考え方は現状で可能な方法としてかなり有効であるように思われる。より多くの区民に、区内のより多くの場所を「アメニティ・ウオッチング」してもらえような取組み、区民が主体的に街のよさを見い出せるようなしなかけを区として継続的に行っていく必要がある。

区内をよく知ってもらうという試みは各区とも盛んであり、緑区や旭区などの「地区カルテ」のように豊富な資料を持ったものから「港北ウオーキングマップ」など実際に持ち歩けるものまで、さまざまな工夫がなされている。

また、実際に街を歩くと「ウオークラリー」(単純化されたコマ

図を頼りに、途中で問題を解きながらゴールをめざして歩く競技)なども、IY Y(国際青年の年) 神奈川県青年実行委員会や、瀬谷区の「青年のつどい実行委員会」などで行われている。

風景をとらえる催しとしては、市民局などが中心となって、さまざまな写真コンクールなどが行われている。特にさわやか運動をテーマとした、さわやか写真展では優秀作品を各区役所のロビーなどに巡回展示しPRをはかっている。

また、金沢区内の小学校では社会科を研究する先生たちが中心となって、四年生社会科の副教材用として「かなざわ」という地理の冊子を発行している。子供たちにわかるものであり、郷土を勉強しようとする大人たちにとっても参考になるものである。区役所も行政として力を入れ、こういった冊子を多方面で活用できるようにすることも今後の検討課題である。

④—まちへの愛着おこし

こうした事業を大きく総合し「まちを愛する下地づくり」「ふるさとづくり」として明確に位置づけ、区を単位として意識的・継続的に事業化していくことが望ましいのではないかと。

街を使って遊ぶというウオークラリー

表一2 アメニティ資源 人気ベスト10

感じがよくてまた行きたいところ	主な理由
1 称名寺	歴史がある、静か、自然がある
2 野島公園	景色がよい、子供が遊べる
3 海の公園	潮干狩りができる、広々している
4 金沢自然公園	自然に親しめる、広々している
5 円海山周辺ハイキングコース	自然がある、ハイキングによい
6 金沢市民の森	自然がある、ハイキングによい
7 釜利谷市民の森	自然がある、ハイキングによい
8 富岡総合公園	自然がある、緑が多い
9 朝比奈切通し	自然がある、歴史が感じられる
10 県立金沢文庫	歴史がある

や、街を見ると「私の新八景写真展」などから「私のアメニティ」を区民のひとりひとりに発見してもらい、「私たちのまち」を実感してもらおう。それは富岡の人、釜利谷の人、六浦の人と同じ金沢区民として地域連帯できるような仕方がふさわしいのである。

「私たちは私だけのものではなく、みんなのものというように意識を発展させていく。それは、自分たちの家の前の道路が広がると車がふえて困るとか、市民利用施設ができるとさわがしくなる、あるいは気分が悪いといった仕方施設とかかわるのではなく、どうしたら「私たちの街」が住みよくなるのか、残された自然とくらしを支える文化が共存できる

表一3 アメニティ資源 ワースト10

感じのわるかったところ	主な理由
1 侍従川	水が汚い、悪臭、ゴミ
2 平潟湾	水が汚い、悪臭、ゴミ
3 宮川	水が汚い、悪臭、ゴミ
4 能見堂跡	荒廃している、宅地化している
5 鼻欠地蔵	荒廃している、宅地化している
海の公園	汚い、泳げない、人工的
八景駅前商店街	ごみごみしている、道が狭く危険
8 六浦駅前商店街	ごみごみしている、道が狭く危険
富岡駅前商店街	ごみごみしている、道が狭く危険
柴漁港	海が汚い、雑然としている

てお互いを大事にできるのか、という立場で行政施策にかかわっていくためのステップなのである。

「私たちの街金沢」をより住みよいものにするために地域がどうなればよいかについて、話し合う機会を区民会議などに求め、そのための地域の集会などを区民自らの手でもりあげることが本来的な意味での住民参加であり、区民の市政参加につながると思う。

そういった意味で、この「計画」を足がかりとして、意識が高まるような事業プランを長期的に実施していくとき、常に区民と同レベルの感覚でコンタクトを持ち得るような区役所の役割が期待されてくると考えるのである。

四—おわりに

区民意識調査によると、区民は歴史・文化的資産、身近な緑、さわやかな空気や豊かな自然について満足度が高く、評価も高い。一方、区内で一番「感じの悪いところ」として川の汚なさがあげられた(表一2、3)。本来、川は「水遊びをした思い出の場所」となり自然に親しむ絶好の場所のはずである。行政としても、下水道の整備や河川の改修などによって親しみもてる水辺にする努力はしているのである。現在の汚ない川も、汚ないから嫌い、愛着が持てないといって見捨てるようなかわり方ではなく、「私たちの街」を区民の力でどう住みよくしていくか、そのために川をどうしたらよいか考える下地を用意し、区民の目をそらさないところからやがて愛着が生まれ、ふるさと意識が根づくのではないだろうか。

よい風景に見とれるだけではなく、できの悪い風景が立派に成長してゆく過程に街を愛する喜びが、より大きく息づくのだと思う。

△金沢区政推進課調整係V